

## 早川俊二 小品に投影する自分の宇宙

井出 洋一郎

### 素描に見る独自の魅力

パリで制作一筋の早川俊二の存在が、日本でもとうとう見すごせなくなった。あとは一気に世間の注目を浴びるだけだろう。

私などはこのまま伝説の画家にしておいて、このまま隔離して置いたほうがご本人のためだと思っていたら、故国で確実に増えていたファンがそうはさせてくれないらしい。いずれ大きな個展が準備されるだろうから、この度の小品展は彼の八年ぶりの帰国みやげというところか、と考えていた私も甘かった。東京に届いた作品を拝見してから、しみじみ画家としての彼の真摯な態度に感銘を受けたのである。彼はますます透徹した目を持ち、技を磨いて、この小品に自分の宇宙を投影していることがわかる。

この二、三年彼は「日本の絵画・新世代一九八九年」展（上野、松坂屋）や「ヴェガの会」（渋谷、西武）などのグループ展にタブロー数点を発表してきたが、まだ知る人ぞ知るといえよう。この機会に早川芸術の充実ぶりを多くの人に味わってもらいたい。日本の現代画家にはまれな美点を多く持った人だからである。何より対象を動じず直視する厳格な造形性に富んでおり、したがって線にしても色彩にしても内面的だが、寡黙のうちに言いたいことを全部言うてしまうというかなり手ごわい画風である。

早川と私とは立場が異なるが、同じ歳という共通点がある。なのでパリで会って話しこんでも全く違和感がない。一九五〇年長野市の近郊に生まれ、初め創形美術学校に学び、一九七四年にパリ国立美術学校に留学。だからここらへん的心情は良くわかる。ボザールでは特に彫刻家マルセル・ジリに師事。早川の素描の独特の魅力は、やはり彫刻家の造形感覚によるものであろう。例えばジャコメッティの素描の力強く、また透明感のあるその個性は、早川の血脈にも流れている。また先日ヘンリ・ムア展の素描を見て、同じことを考えた。

### 「普遍性」と格闘した18年の軌跡

ボザールでの修業の成果は大いに上り、優等賞であるムフレ賞を受け、素描が4点買い上げとなる。以後素描中心から近年タブローへと進み、パリを主な場として個展、グループ展で活躍。地元でも評価も固まり、来年出版されるボザールの絵画教授であったダニエル・ラコムの6分冊の絵画技法書のうち、一冊の「素描における光」に早川の素描5点が、また「絵画におけるマティエール」にはタブロー2点が図版掲載されると聞いた。さすが先生だけに早川の個性を鋭く見抜いたわけである。早川の裸婦素描はまさに光の芸術だし、タブローは生きたマティエールそのものである。

早川は「日本の絵画・新世代一九九八年」展の図録に、こういう一文を載せている。「この我々の宇宙の時空は、永遠にあるものではなく、限られたものらしい。しかしこの地球上に偶然に生まれた小さな生命現象から見ると永遠にも感ずる。昔から言われ思われ続けてきた、”絶対、唯一、永遠、普遍”の定義は揺らいだが、にもかかわらず我々の力を超えた高い普遍性があるらしい。画家が何もない白いキャンバスを前にした時、イメージするものは、この普遍性と対面しようとする事だろうか」

そして画家は展覧会で見たミケランジェロの晩年の素描に、この「普遍性」を実感し、強く打たれる。……

早川はパリという、画家にとって極めて恵の多く、かつ厳しい場所にいる。描くものがあるというより、描かねばならぬ環境があるのだ。日本という“普遍性”とは最初から縁のない土地から飛び出して、一八年間この普遍性と格闘して来た彼の軌跡が、この数点の小品にもうかがえるのである。そして今の私達を困む日常の状況に、痛烈なパンチを食わせるだけのパワーも、そこにはまた秘められていると思う。

私にとって二年ぶりの画家との再会が大いに楽しみであり、また八年ぶりの帰国で受ける画家の故国の印象にも興味津々である。

(美術評論家 現府中市美術館長)

1992年 月刊美術11月号掲載